

# ヒノキ

いにしへに ありけむ人も わが如か

三輪の檜原に 挿頭折りけむ

柿本人麻呂

「昔の人もわたしと同じように、三輪山のヒノキの枝を折って、髪に挿頭したのであろうか」。大神神社の摂社である檜原神社は、以前はヒノキの林で覆われていた。ここは昔、天照大神の神霊を伊勢神宮に遷す前に祭祀した「倭の笠縫邑」で、「元伊勢」とも呼ばれている。

ヒノキは日本国産種 (英名 Japanese cypress) であるが、『本草綱目』の檜は「檜 柏葉松身」とあるように、葉が柏、幹が松となっているので、ビャクシンを指しており、別物である。ヒノキは耐久性が高いので、古代から宮殿、神社仏閣に利用され、屋根も檜皮葺のものが多い。世界最古の木造建築・法隆寺もヒノキで出来ている。『日本書紀』には、素戔鳴尊が髭を抜くと杉になり、胸毛を抜くと檜になり、尻の毛は椈、眉の毛は樟になった。そして杉と樟は船に、檜は宮殿、椈は棺の材料にしたとある。素戔鳴尊とヒノキに因む逸話は出雲国一宮の熊野大社にも残っている。その鑽火殿の案内書には、「御祭神スサノオノ大神は『檜の臼・卯木の杵』で火を鑽り出す法を教えられたので、熊野大社を『日本火出初社』とも讃えます」とある。ヒノキは火を起こす木であるので「火の木」が語源とする説もある。

古伝『秀真伝』によると、素戔鳴尊の性格は荒々しく癩癩をおこすとすぐに泣きわめく子供であった。早苗が出揃った苗代にもう一度稲種を撒き散らし、民を困らせたこともあった。このように手のつけられない子供にしたのは、伊弉冉尊が生理のときに夫と交わったためであると思い込んだ彼女は、世間に迷惑をかけた隈 (蔭、心の闇、汚れや罪) を自ら引き受けて民に補償している。そして自分や我が子だけでなく、民の隈をも清めようと隈の宮 (熊野神社) を建立したのである。その後大規模な山火事に見舞われ、伊弉冉尊は火の神を勧請したが、お祈りしながら炎に巻き込まれてお亡くなりになった。『秀真伝』ではどうやらその山火事の原因は素戔鳴尊の火遊びだと匂わせている。自らの不始末で大好きな母親を亡くしたことに気づいたとしたら、素戔鳴尊はその後心のかげを引きずっていたことであろう。

『秀真伝』には、稲の害虫を追い払う神事で、ヒノキの薄板で作った檜扇が用いられたことが記載されている。ヒノキには邪気を追い払う日の霊気があると考えられていた。「日の木」「霊の木」とも呼ばれる所以である。ヒノキの成分には殺虫、防腐、消臭、殺菌、リラックス効果があることが証明されており、最近では新型コロナウイルスを不活性化する作用があることも確認されている。

大塚敬節著『漢方と民間薬百科』には、ヒノキが口内炎や歯痛、利尿に用いられて来たことを記すとともに、明治十三年十一月発行の「温知医談」に載る某氏の談話を紹介している。「あの有名な五代友厚君が、かつて頑固なりウマチにかかり、諸医事をつくし、百方試みたが寸効がなかった。一日植木屋が、ヒノキの節が痛風を治すという話をしたので、これを捜して煎じて飲んだ所、五、六日で痛みが拭うように取れた。・中略・私もこれを聞いて、ヒノキの節 3~4 g を、水四~五合で煎じたものを一日量として、数人に試みたのに、皆よく奏功した」とある。五代は糖尿病で酒豪だったので、湿熱が絡む痛風だったのであろう。湿熱を改善する生薬が、もしも政治的な理由で手に入らなくなったら、ヒノキの節を用いてみよう。

また、自らの汚れを祓おうと思ったら、ヒノキの湯船に浸かるという手もある。

(山人)

甲  
甲 甲 甲